

1-3 最上川と合流し、土砂はさらに庄内平野へと運ばれる

庄内町を南北に流れてきた立谷沢川は、清川地区で最上川と合流する。その合流点付近は、どんなようすだろう。その先、庄内平野までの土砂の流れを見てみよう。

■立谷沢川の土砂と最上川の流れがつくった庄内平野

川の下流には、川が運んできた細かい土や砂が積もって平野ができます。しかし、立谷沢川は最上川に合流しているため、上流から運ばれてきた土砂は、一部は合流点手前に積もって平地をつくっていますが、多くは最上川に流れこみます。

立谷沢川は土砂をたくさん流す川として知られ、上流に砂防堰堤(16ページ)などがつくられるまでは、最上川に流れこむ土砂の7割は立谷沢川から出ているといわれていました。この大量の土砂は、最上川が谷を出る清川地区から下流にたい積して大きな扇状地(谷の出口にできる、土砂が扇形に積もった地形)をつくり、さらに日本海の河口に向かって広大な庄内平野をつくりました。



合流点手前の川原のようす
丸い石が多く積もっている。これらの石の下には細かい砂も積もっている。



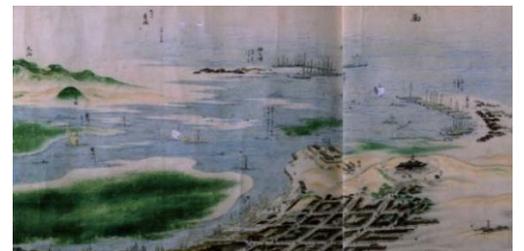
立谷沢 - 最上川の合流点から庄内平野へ

立谷沢川が最上川に合流した清川地区の下流から、土砂が広くたい積し庄内平野ができていくのがわかる。右上は庄内平野のようす。



最上川に合流する立谷沢川(→)

立谷沢川から最上川に、たくさんの土砂が流れこんでいる。



江戸時代の酒田港絵図

最上川が運んできた多くの土砂が湾内にたい積しているのがわかる。(国土交通省酒田港湾事務所資料より)

最上川舟運で栄えた清川地区

最上川はむかしから、東北地方の内陸と日本海を結ぶ大切な交通路でした。江戸時代、内陸から最上川を通過して酒田の港に集められた米や紅花などは、船で大坂(大阪)や遠く江戸まで運ばれていきました。清川は、最上峡の出口であり、立谷沢川からの土砂のたい積で船だまりとなったところです。最上川舟運の水駅として栄え、江戸時代には庄内藩の川口番所や船見番所も置かれていました。清川地区には、古い歴史を今に伝える史跡や寺社などが多く残っています。



むかしの清川港のようす
「写真でみる清川の歴史」より



清川の芭蕉上陸の地
「奥の細道」の旅で、出羽三山にもうでた俳人の松尾芭蕉が舟を降りた場所。記念碑が建っている。



清川神社

江戸時代の終わりころの清川出身の志士・清河八郎をまつる神社で、銅像や資料館がある。



御諸皇子神社

源義経一行が一夜を過ごしたという言い伝えがある。

■北楯大堰・吉田堰がつくられたわけ

庄内町の余目地区、最上川と京田川にはさまれた平地は、今は水田が広がっていますが、江戸時代初めまでは荒れ野でした。近くに2つも川があるのに、土地が川より高い場所にあるため、農業に欠かせない水を引いてくることができなかったからです。そこで今から410年ほど前、山形城主・最上義光の家来で狩川館主であった北楯大学利長が、困難な工事の末に、立谷沢川から水を引いて「北楯大堰」とよばれる農業用水を完成させたことはよく知られています(くわしくは「わたしたちの庄内町」を見よう)。北楯大堰の完成で、荒れ野は水田に生まれ変わりました。

北楯大堰ができたあとも、最上川の南側には、土地がまわりより高くなっているため水がじゅうぶんにとどかない「岡所」とよばれる土地が残っていました。岡所では畑作が行われていましたが、明治時代になって、佐々木彦作が最上川から水を引いて「吉田堰」をつくと、ここでも米づくりができるようになりました。

■1年を通じて風が強い庄内町

春から秋にかけて、清川地区付近から庄内平野に向かって吹く、強くてかわいた冷たい東南東風を、「清川だし」といいます。太平洋から奥羽山脈を越えて吹いてきた風が、新庄盆地を経て最上峡に集まり、清川付近で一気に吹き出しているのです。

庄内町はまた、冬に日本海から庄内平野を通して吹いてくる北西の季節風もたいへんに強く、1年のうち90日くらいは風速毎秒10m以上の強風を観測しています。

こうした強風は、農作物に被害を与えたり、大火事を引き起こしたりする「悪風」でしたが、庄内町では現在この風を「自然エネルギー」として活用し、風力発電を行っています。



だしを活用した風力発電用の風車(狩川)
清川だしは現在、風力発電に活用されている。



清川の御殿林
御殿林は、強風を防ぐために、江戸時代につくられた防風林。



屋敷林のある家
庄内町では、強風が吹いてくる方向に、屋敷林とよばれる防風林を植えている家が多い。(写真提供：山形大学・八木浩司教授)



立谷沢川から庄内平野へ水を導く北楯大堰(山ぎわを通っている)(写真提供:山形大学・八木浩司教授)



堰の水で米づくりをする余目地区の水田



清川だしと冬の季節風



最上峡
最上峡は戸沢村の古口地区から庄内町の清川地区までの、おおよそ15kmの区間。山が両岸にせまり、風の通り道となっている。